

地域的祭祀の起源と機能

守山市小津神社祭祀圏を事例に

小島道裕

The Origin and Function of Regional Festivals: Festival Zones at Ozu Shrine, Moriyama City

はじめに

- ① 小津神社の歴史と祭祀
- ② 祭祀圏とその要因
- ③ 祭祀の主体
むすび

【論文要旨】

滋賀県守山市所在の小津神社祭祀圏を素材に、地域的祭祀の歴史的な背景を考察する。祭祀圏の地域が決定される要因としては、荘園、水利圏、交通路などが考えられるが、具体的に検討すると、いずれも祭祀圏全体に共通するものではなく、その地域を決定する要因としては単一では不十分であり、複合した要因によるものと考えられる。次に祭祀を担った主体の問題から考えると、土豪層の関与は間違いなく、またこの地域では一向一揆等の土豪層を中心とする組織も見られるが、祭祀圏を土豪層の連合から説明することにも無理がある。

そこで当時の村落の状況に目を向けると、十五世紀頃には集落が移転して、在地領主と百姓の惣の共同により、現在に続く新しい集落が成立する現象が広範に見られる。この百姓の惣が、このような集落を基盤として新たに成立した地域社会において、様々な地域的問題の解決のために連合し、地域的共同体を形成して、その象徴として地域

的祭祀が行われたのではないかと考えられる。ここに地域的祭祀の直接的な起源と機能を求めることができる。

はじめに

筆者は歴史学（中世史）を専攻する立場から本研究に参加しており、研究課題である複数の特定村落による神社祭祀（本稿では「地域的祭祀」とする）の歴史的な意味、すなわち、それがいつ、どのように、或いは何のために成立し存続したのかを考察することが課せられた課題である。これについては、その成立を示す史料が存在しない限り、直接答えを出すことは困難であるが、しかし、地域史の上で、今日に至る歴史的変遷の中で、それに密接に関わり大きな影響を及ぼしたと考えられる事象を推定することは、ある程度可能と思われる。そこで本稿では、筆者がこれまで若干の地域的な検討を試みてきた守山市域の小津神社祭祀圏を事例に、多少の考察を行うことで責めを塞ぐこととしたい。

①小津神社の歴史と祭祀

小津神社の祭祀は、サンヤレ踊り・長刀振りという芸能を伴うことで知られており、詳細な報告書も出されているため、⁽¹⁾まずこれによって神社と祭祀の概要を紹介しておきたい。

歴史

小津神社は琵琶湖東岸に近い守山市杉江町に位置する、広大な境内地を持つ神社で、古代豪族小津氏の祖神として創始されたとされ、延喜式神名帳に野洲郡九座の一つとして「小津神社」があること、平安時代中期の作とされる神像が伝世すること、また境内に古墳群もあることなどから、おそらく有史以前にさかのぼる地域の祭祀の場だったと考えてよいであろう。現在の本殿は大永六年（一五二六）の改築とされ、三之宮

本殿は桃山時代の作である。

祭祀に関する伝承としては、もと矢島の真光寺へ「お渡し」をしていたが、慶長六年（一六〇一）に赤野井の専念寺三代伊賀坊了誓が「諏訪の殿様（諏訪氏）」と計って赤野井まで引っぱってきた、と言われている。伊賀坊は、矢島の矢島松斎と共に洪水避けの堤を築いたことなどで地元ではよく知られる実在の人物であり、こうした在地領主的な存在が、一時祭祀の運営に深く関与していたことがうかがえる。また、三ノ宮の隣には「山賀棧敷」があり、かつては山賀の木下という殿様がここで長刀踊りを御覧になったともいうが、木下氏については未詳である。

もと矢島に「お渡し」をしていたことについては、弘法大師が湖を渡った際、杉江の小津神社の明かりを頼りにして矢島へ着いたため、矢島寺を建てた、という伝承によるという。後述するが、この地域は、もと三ノ宮があり「宮本」であったという山賀をはじめとして、本来山門の湖東での拠点であり、神宮寺「智泉院」も山科の毘沙門堂門跡に属する天台系の寺であった。

祭祀

祭祀に際しては、踊りまたは神馬などを奉納する「踊り番」と、神輿を昇

表1 祭祀の当番（註(1)文献による）

踊り番		昇き番	
一	赤野井	矢島	
二	矢島	石田・十二里	
三	石田・十二里	赤野井	
四	金森	欲賀・森川原・大林	
五	三宅	山賀・杉江	
六	欲賀・森川原・大林	三宅・金森	
七	山賀	玉津青年会	
八	杉江	小津青年会	



図1 小津神社祭祀圏の村々 (は1889年以降。 は寛延4年(1751)時点)
(ベースマップは、2万5千分1地形図「草津」「堅田」1920年。----- は郡界。)

く「昇き番」があるが、内容と順番は別表のようになっており、八年に一度当番がまわる仕組みになっている(表1)。このように、祭礼と芸能は当番制となっており、全体としての組織ではなく、個々の村落単位で傳承されている。

② 祭祀圏とその要因

範囲

小津神社の祭祀圏(氏子圏)は、現在は守山市内の金森・三宅・大林・欲賀・森川原・山賀・杉江(以上旧小津村)、赤野井・矢島・石田・十二里(以上、旧玉津村)の十一村落である。すなわち、一八八九年(明治二十二)施行の町村制による、小津村・玉津村がその範囲になっており、これは祭礼に青年団が関わっていることに関連すると思われるが、かつてはさらに広く、寛延四年(一七五二)の「小津大明神御神事帳」(小津神社蔵。註(1) b所収)によれば、守山、吉身、播磨田が含まれている。(なお、図1に示した集落の内、荒見は矢島と播磨田、伏野と今市は播磨田に属する。)

以上の範囲を見ると、古い時期の広域の氏子圏でも、南は野洲郡の範囲までで、栗太郡域には及ばないのが一つの特徴となっている。北側・東側には、特に明確な境界は見出し難いが、いずれにしても小津神社から連続して広がる範囲であり、距離的な要因による地域単位と見ても特に不自然な点はない。

この意味で、また小津神社自体の起源が(地域的祭祀の行われる神社の多くは同様と思われるが)古代ないしそれ

以前にまで遡ると考えられることから、地域的祭祀自体も、原始・古代からの地域における祭祀に由来すると考えても誤りではないであろう。しかし、この間に地域社会、特に村落のあり方自体が当然大きく変化しているはずであり、特定の複数村落による祭祀の意味を考えようとする本稿の目的からは、地域の歴史的展開の中にその要因を探ることが要求される。

郷・荘園・藩

まず古代の郷については、比定は困難で諸説があるが、『野洲郡史』（一九二七年）は、『和名抄』の野洲郡六郷の一つ「明見郷」を玉津村・小津村に比定しており、もしこれが正しければ、結果的に近代の祭祀圏とはほぼ一致することになる。小津神社がこうした郷の範囲を対象にする神社だった可能性なども考える必要があるかもしれないが、しかし前述のように、少なくとも村落史のレベルにおいては、この「郷」が超時代的に祭祀圏を規定したとは考え難い。

そこで、次に中世における地域的な単位としての荘園を取り上げると、次のようなものを検出することが^(3・補註)できる。

- ・湯生庄 欲賀・三宅・大門・長束（結園郷も同か）
- ・田中庄 守山・吉身・播磨田・市三宅・金森
- ・山賀庄 山賀・杉江（山賀郷とも）
- ・三宅郷 現三宅町・十二里の一带
- ・赤野井庄 赤野井
- ・吉身庄 吉身

近世の地誌によるものもあり、またこれですべての荘園・郷を網羅できているわけではなく、特にもっとも比率の高かったと思われる山門の荘園については史料を欠くが、そうした限界を考慮しても、やはり小津神社の祭祀圏に相当するまともな荘園には見出し難く、それとは直接

関係しない、ないしはそれを超えた地域単位なのではないかと考えられる。小津神社自体の性格も、日吉社・春日社などのような、特定の荘園領主との関係を窺わせるようなものではなく、これも一般的に、地域的祭祀の対象となっている神社にかなり共通してみられる性格ではないかと思われる。

また、近世における領主を見ても、この付近は幕領、旗本領、遠隔地の藩領に細分化されており、地域的なまともなものはほとんどない。祭祀圏が、こうした国家レベルでの政治的・制度的な枠組みに、少なくとも直接基づいているものでないことはほぼ間違いないと思われる。

水利

政治的ないし公的な要因をはなれた社会的な要因を考える場合、単なる平面的な領域としての地域ではなく、やはり祭祀の形態にも見られるような、個々の村落を主体とした、その連合としての地域を探索する必要がある。これに関しては、近江八幡市馬淵（馬見岡神社）の宮座についての萩原龍夫の著名な研究⁽⁴⁾を参考とすべきであろう。

この祭祀組織は、馬淵・千僧供・岩倉の三つの村落からなるが、この三ヶ村は古くから用水の争いがあり、文明十九年（一四八七）には相互間の用水契約が成立しており、またその際には西村（馬淵）と南村（岩倉）の間に紛争があり、上村（未詳）と「千僧供ノ衆」の仲裁で解決したことが知られる。そして、水の配当量「四分四分の二分」の比率は、祭祀の負担の割合に比例しており、また神輿渡御の際に通る神門門前の埋め石の間隔でこれを象徴している。これらのことから、萩原は、用水が三ヶ村の競合の場となりやすく、中世以降それを繰り返したことが連合の祭祀組織を発達させたのであり、また「闘争のさまを祭りの中に現出すること」をせず、樽俎折衝・外交的交渉によって打開する道を、厳密至極な祭祀儀礼を通じてくりかえし演出しようとした⁽⁵⁾としている。な

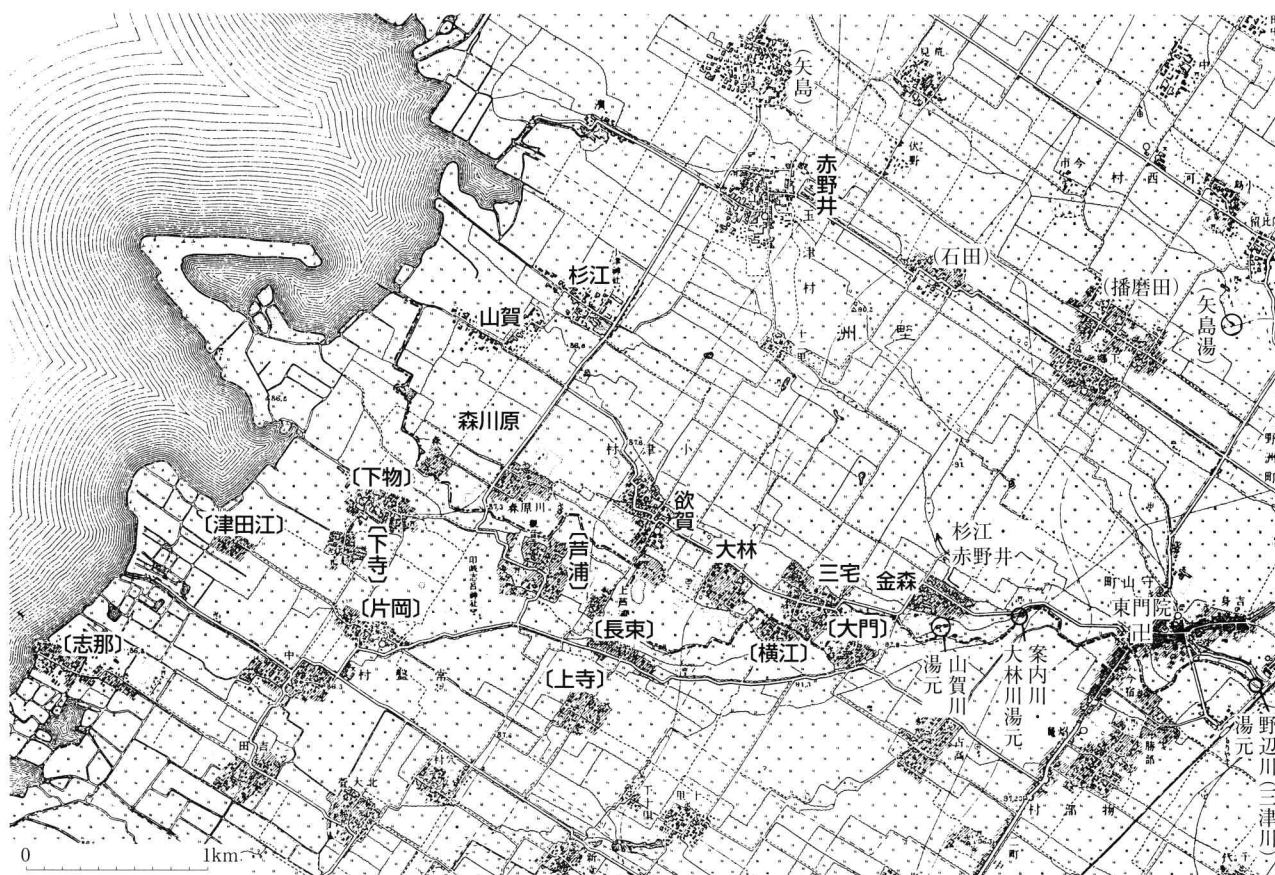


図2 金森を中心とする水利と下流の村々(〔 〕は案内川流域の村)
(ベースマップは、2万5千分1地形図「草津」1920年)

お、この場合は「馬淵庄」という荘園の枠内にも納まるようだが、やはり荘園制の枠組み自体がその契機とは考え難く、水利という具体的な村落間の問題が契機となっている、なしはむしろ水利によって荘園の範囲が規定されているとみなすべきであろう。

地域的な村落連合による祭祀の一つの典型であり、その起源と機能について最も明快に解明された事例である。ただ、一般的には、必ずしもその契機は水利の問題である必要はないと思われ、普遍化していえば、何らかの、あるいは様々な地域の問題の解決、ないし秩序の維持・安定化がその起源と機能、そして存続の理由になっている、と考えるべきかと思われ、本稿でもこの視点を受け継いでいきたい。

では、小津神社祭祀圏の場合、水利の關係はいかになつてゐるであらうか。全体についての詳細な報告はないが、地元での調査報告がある金森と、筆者がかつて調査した矢島について、検討してみたい。この両村は祭祀圏内でそれぞれ上流と下流に位置することも、全体を考える上で好都合である。

この付近においては、水利の中心となっているのは、野洲川の伏流水であり、旧河道などに存在するいくつかの湧水地から用水路を引いて、下流の村への灌漑を行っている。金森は中でも有力な湧水地の所在地であり、近年まで金森を流れる六つの川筋にあたる十六郷（金森・三宅を除く）の村々が湧上り（用水路の修理・清掃・確認の行事）を行っていたという（表2・図2）⁽⁵⁾。

表2の内、1・2・3および吉身に発し守山を通る金森・三宅の用水5・6は、金森から西へ連続して続く、旧野洲郡

表2 金森の六つの川筋と川下の十六郷（註（5）文献を一部修正）

域の村落群の用水路であり、これらの村落はすべて小津神社祭祀圏に入っている。しかし、4の案内川（河原川）によって灌漑される川筋、すなわち大門から下物・下寺に至る村落群は、小津神社の祭祀圏には入っていない。これらは、先述のように、野洲・栗太郡境である堺川の南側に位置する旧栗太郡域の村々である。こうした水利ないし野洲川旧河道の両側の自然堤防などの自然環境自体が郡界にも影響していると思われるが、この郡界をはさんだ部分では、灌漑経路の違いが祭祀圏の違いと、少なくとも現象的には一致していると言える。あるいは、水源（湧水地）を同じくしながら祭祀圏が異なっている、とも言える。

一方、小津神社祭祀圏の全体を見ると、金森から森川原にかけての村落群および杉江・赤野井については、金森からの水利で結ばれていると一応言うことができるが、矢島・石田・播磨田などの村落は、それからはずれるようである。

そこで、次に矢島の水利について見てみると、図3のように、矢島へは、①赤野井（堰は紺屋淵・四分六）、②播磨田（矢島の湯川）、③石田

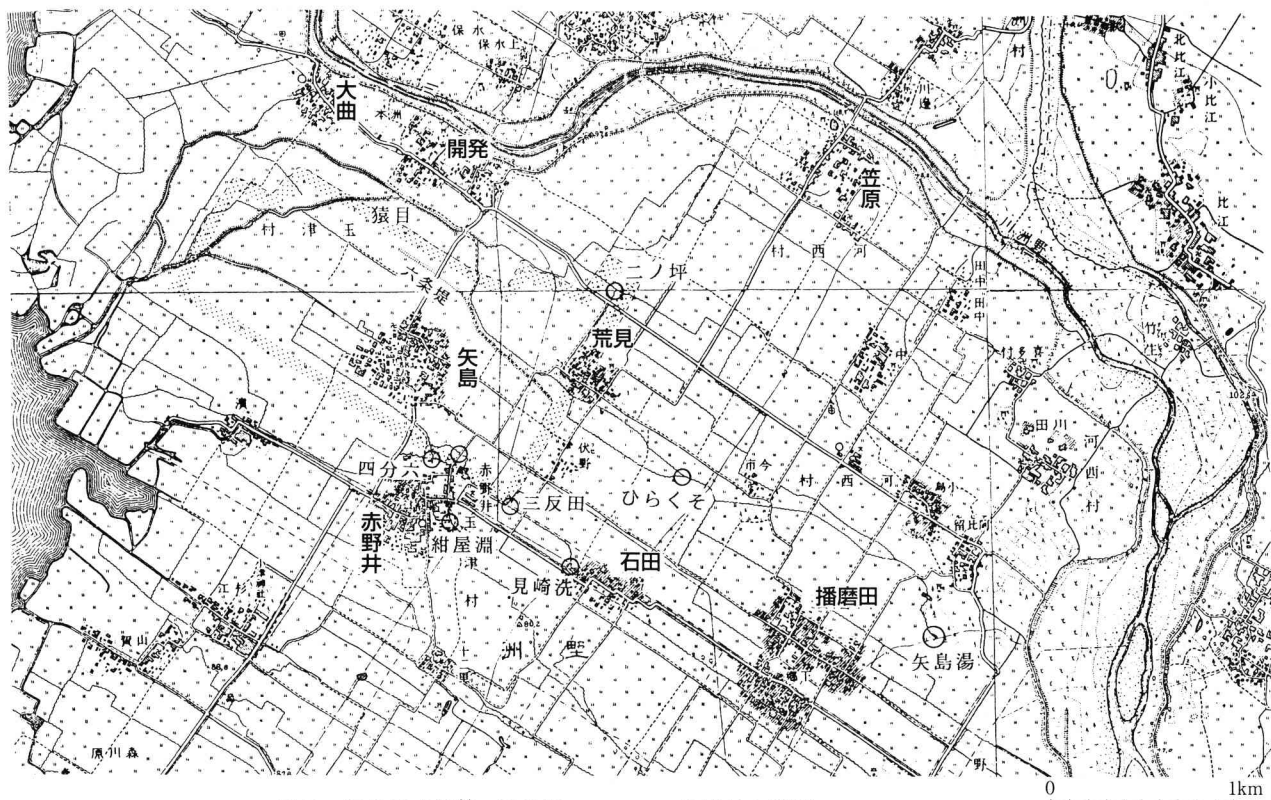


図3 矢島の水利⁽⁶⁾ ○井堰 ■矢島村の範囲
(ベースマップは、2万5千分1地形図「堅田」「草津」「八幡」「野洲」1920年)

(三反田川)、④開発(法竜川)の四つの水路から、各所で堰によって分水されていることがわかる。⁽⁶⁾

これから分かることは、矢島は赤野井を通じて、金森からの水利圏とも間接的につながっていること、また、播磨田・石田などの、小津神社の祭祀に加わっているが、金森からの水利圏とは別系統の村々と水利の上で直接の関係にある、ということである。つまり、小津神社祭祀圏では、すべての村が単一の水系にあるわけではないが、間接的なつながりや隣接し輻輳した関係をもつ村落群であると言うことはできる。

水利をめぐることは、当然用水路や分水の問題について様々な争議が起こっており、その解決が地域における重要な問題であったことは間違いないが、しかし、水利の争議は、通常は隣村同士、ないし直接関係する数ヶ村程度で争われるのが普通で、小津神社祭祀圏の場合、馬淵のように水利の問題のみを直接の契機として全体が成立しているとは考えがたいし、祭祀儀礼においても、馬淵のように水利問題が直接構造化されているといった様相は特にうかがうことはできない。とりあえずこの場合、水利と祭祀圏は、一定の関係はあるが、その決定要因とは言えない、としておきたい。

交通路

では、他に祭祀圏の範囲を決定する要因はあるだろうか。考えられる一つに、交通路がある。前述の祭祀に関する伝承によれば、矢島が赤野井に移る前の本来の御旅所であり、また山賀には元三ノ宮があったとされるなど、小津神社所在地の杉江をはじめ、琵琶湖の湖畔に面した集落群に濃密な関連がうかがえるが、これらの集落は、また「浜街道」と呼ばれる道路でも結ばれており、陸上交通路においても相互に関係があったはずである。また、小津神社祭祀圏の中では、播磨田・赤野井や、金森・森川原・山賀などにも湖岸へ向けて走る道路が認められ、金森・杉

江間には「馬街道」と呼ばれる道もある。一方、金森から分かれて、大門から長束―片岡―志那(港)へ続く「志那街道」は、中近世の有力な道路だが、この沿線の村々は、先の「案内川」の川筋とも一致し、先述のように小津神社祭祀圏にははいっていない。

以上、交通路においても、各村落は部分的には直接関係し、また相互に輻輳した関係を持っているが、やはり祭祀圏全体を直接決定する要因とは考えがたい。

このような地域を構成する自然的・社会的な要因は、この他にも様々なものが存在したであろうが、結局のところ、祭祀圏全体に共通する単独の要因が存在したと考えるのは無理のようであり、地表面の上で連続した関係にあるこの地域内の村落が、様々な要因を通じて相互に関係を持っていたであろうことを想定しうるのみである。

③祭祀の主体

そこで次に、祭祀圏という地域の要因の問題を若干離れて、祭祀を担った主体について考えてみたい。

在地領主の関与

伝承にも見られるように、小津神社の祭祀には、御旅所を引っぱってきたという赤野井の伊賀坊(専念寺)、諏訪氏といった土豪的存在が関わっていたことがうかがわれる。小津神社の祭祀の場合、どのような形で土豪層が関与していたのかはこれ以上には明らかではないが、一般的に言って、中世後期においては、各村落内に存在した在地領主が祭祀全体の執行に強い影響力を持っていたことは当然考えられるところである。

筆者の知る近江の例でも、例えば、栗太郡栗東町笠川(図4)では、笠川城趾に隣接して八幡神社があるが、この八幡神社は地域的な神社で

ある大宝神社の御旅所ともなっており、城館址の一隅にある土手の上で、殿様が八幡神社へ来る大宝神社の祭りを見物した、という伝承がある。⁽⁷⁾

また、甲賀郡甲賀町上野の背後の丘陵上に所在する富田氏の城、富田山城・勘四郎山城の麓には、館址と思われる「富田屋敷」という一画があるが、その一隅に接して、やはり地域的な神社である油日神社の御旅所が存在する。⁽⁸⁾

こうした事例は、村落レベルの在地領主が、地域的な祭礼の、少なくとも各村落における部分に強く関与していたことを示すものと言える。では、これを更に敷衍して、祭祀圏全体をこのような土豪の地域的連合体と見ることはできるだろうか。

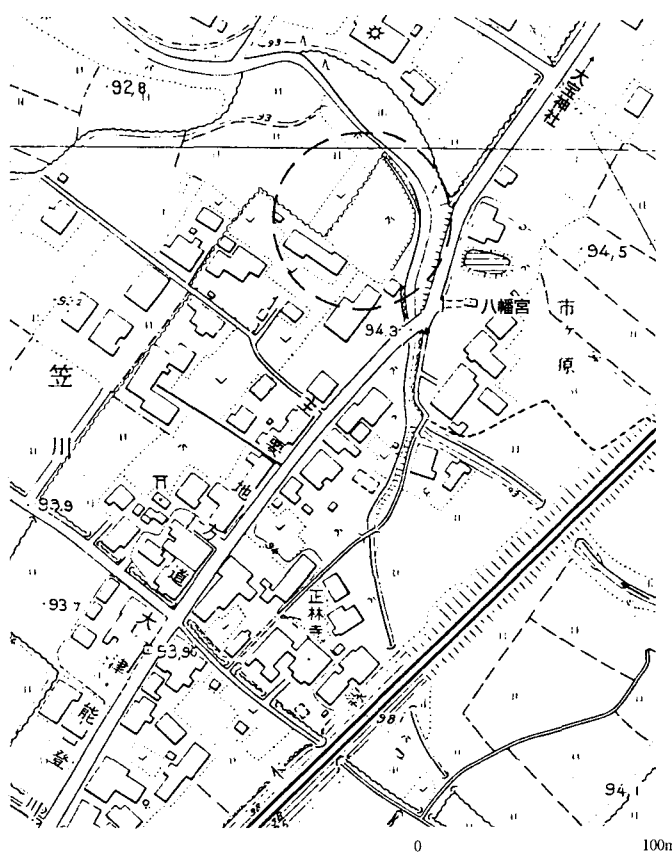


図4 笠川城（丸囲み）と大宝神社御旅所の八幡宮
(註(7)文献より)

土豪連合（一向一揆）

この地域においては、十五世紀後半、京都の本願寺を破却された蓮如の滞在を機に一向一揆が形成され、金森での山門勢力との武力衝突が起こったこと、更に信長の近江侵攻の際にも、金森・三宅がこれに対抗する勢力の拠点となったことなどが知られており、そこには土豪層が強く関与していたことを既に指摘した。⁽⁹⁾ こうした一向一揆のまとまりが祭祀圏に影響している可能性を考えてみたい。

蓮如の際の一揆に関して言えば、『金森日記抜』には、蓮如が滞在した寺院（道場）として、この付近では、荒見・開発・矢島・赤野井・三宅の各寺院が挙げられており、開発を除いては小津神社祭祀圏に包含される。こうした蓮如を擁した寺院は土豪的性格が強いが、この他にも、大林の覚明寺、欲賀の浄光寺、山賀の慶先寺など、この範囲には土豪的な系譜を持つ真宗寺院が多い。⁽¹⁰⁾

これに対して、栗太郡側の志那街道沿いの村々は、長束に「三坊」といわれる天台宗の土豪的寺院があったとされ、芦浦には天台宗の有力寺院観音寺があるなど、中世においては総じて天台宗系の勢力が強く、真宗の有力寺院は認めがたい。祭祀圏の区画でもあるこのラインでは、やはり地域的な差が認められ、一向一揆の拠点群と小津神社祭祀圏はかなり重なっているようにも見える。

しかし、小津神社祭祀圏に含まれる守山は、山門の湖東での有力拠点・東門院のある天台宗の勢力が強い町であってこの要因では説明はできず、そもそも一向宗を要因とした場合、その核が小津神社であることの必然性も見出しがたい。そして、それ以上に重要なのは、祭礼を担った主体の問題、すなわち、中世後期において、土豪層の動向と村落の動向が果たして一致しているか、という問題である。

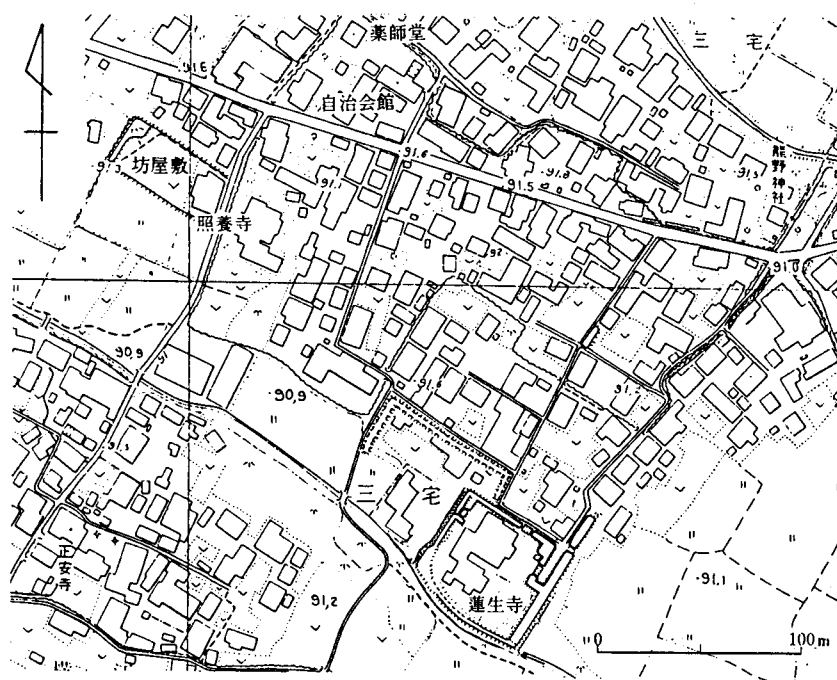


図5 三宅城（蓮生寺）と三宅の集落（註(7)文献に加筆）

村落と百姓の惣

田端泰子の整理によれば、中世村落の類型として、A在地領主型、B地侍主導型、C村人型、の三つが挙げられており、また城館跡と集落の関係から筆者は、a在地領主による集落の再編、b在地領主の城館と集落が併存、c惣による形成、という三つのパターンを挙げ、先の田端の整理と基本的に対応する、とした⁽¹²⁾。しかも、筆者のみるところでは、典型的なaやcはむしろ少なく、何らかの形で土豪・地侍が集落の内に含まれ、百姓の惣と共存している例が多い。a(A)やc(C)は、むしろそ

の偏差としてとらえられるものが多いと思われる。

すなわち、中世後期の集落においては、多くの場合在地領主と百姓の惣が一つの集落の中に並存しており、在地領主の動向のみをもって村落の動向が規定されていたと考えるわけにはいかないのである。例えば、金森では土豪川那辺氏の城館跡と思われる小字「城ノ下」は集落に隣接した位置にあり、これを中心に集落が編成されたとは見なし難く、また三宅では、土豪三品氏の居館でもある蓮生寺は集落の一隅に位置しており、その対極の位置には、惣の会所の系譜を引くと思われる自治会の会議所が、平安仏などの旧仏教系寺院の仏像を集めた薬師堂・釈迦堂の境内に存在し、あたかも両者が対峙しているかのようなのである(図5)。更に三宅には、現照養寺の前身と思われる天台宗(山門末)の真浄坊(青木氏)も存在したことが知られており、村内の領主層の動向も、決して単純ではなく、村内の土豪(の一人)の参加をもって、村落全体が、ひいては地域全体が一向一揆に参加したとは見なしがたいのである。

新たな集落の形成

このことは、集落の形成史からもうかがうことができる。近年の研究によれば、多くの集落は十五世紀を境に移動して現在の集落の位置に再編されているという⁽¹³⁾。例えば、大林・三宅の南に接する横江の横江遺跡は、十五世紀初頭には廃絶⁽¹⁴⁾、欲賀の集落に続く小字「大珍坊」と「南出」の溝囲いの屋敷は十五世紀末から十六世紀初に廃絶⁽¹⁵⁾、杉江では現集落の外で十三〜十五世紀代の集落が検出され、また現集落の水路による区画が十五世紀代に遡ることが確認されており、この間の集落の移動がうかがえる⁽¹⁶⁾。また、文献史料から集落の形成を明らかにした業績として知られる若槻庄の事例では、土地台帳の比較から、徳治二年(一一三〇七)と文正元年(一四六六)の間、おそらく後者のころに屋敷が集中して環濠集落が形成されていることが指摘されている⁽¹⁷⁾。この若槻庄の事例でも、

環濠集落形成の「主動的勢力」は、「衆徒国民たる下司とこれに同調した名主層以下の一般の郷民」とされているが、このようにして十五世紀ころ、在地領主と百姓の惣の協調の下に、両者が並存する新たな集落（集村）が作られていったと考えられるのである。

むすび——新たな地域社会の形成

蓮如を擁した近江湖南の一向一揆と同じ十五世紀後半に起こった山城国一揆では、地域の在地領主層「国人」の集会所が開かれている一方で、「二国中の土民等」も「群集」し、自らの要求の実現を図っていることが知られているが、その背景には、やはりこのような村落における、在地領主と肩を並べる百姓の惣の確立があったと考えるべきだろう。

中世後期村落の以上の状況からは、地域的祭祀の主体も、在地領主層に求める必要はない。在地領主層の役割やその地域的一揆の存在も考慮されるべきではあるが、村落のあり方自体が、必ずしも在地領主層を中心とはしていない以上、それが普遍的な形態であるとは見なしにくい。むしろ、より広範に各村落で成立していたとみられる百姓の惣の方が、こうした地域的祭祀の担い手としてふさわしいのではないだろうか。上級領主との関係などの政治的関係にとられやすい在地領主層よりも、より純粹に地域社会の様々な問題を解決するために、相互に関連の強い村々の百姓の惣が連合し、その象徴として村落の連合による地域的祭祀を行っていたのではないだろうか。

従って、その地域形成の要因は単一である必要はなく、水利をはじめとする、その地域の実情による多様なものであってよいし、またその連合の範囲も、要因の変化によって、時代による変動があるのは当然であろう。小津神社祭祀圏の場合、先述のように古代の明見郷とほぼ一致する可能性もあり、また南側の境界は常に栗太郡との郡境と一致している

ようだが、これも、郷や郡という枠組みに直接規定されたというよりも、むしろ逆に自然条件をはじめとする様々な要因が複合して、自然に、結果的に意味のあるものとして、「郷」や「郡」と同様の範囲・境界になったものと思われる。

そしてその範囲が実質的に形成された時代については、おおむね新しい集落とそれによる地域的共同体が形成された十五世紀頃に直接の起源を求めてもよいと思われる。馬淵の水利協定も、初見はやはり十五世紀後半の文明十九年（一四八七）であった。この頃に形成された新たな集落の形成と共に、現代につながる地域社会、そして地域的祭祀もまた形づくられ、継続されていったのではないだろうか。

やや突飛なようだが、京都における祇園社の祭祀すなわち祇園祭なども、こうした村落連合による地域的祭祀と同様の事例と見ることができないだろうか。すなわち、京都においては、応仁乱後、つまり十五世紀後半頃から、上京・下京という町共同体の連合による地域的な共同体ができてくるが、明応九年（一五〇〇）に復活する祇園社の祭祀は、この下京の町々によって担われたものであり、本来の領主によって行われる祭祀から、下京六十六町が「神事これなくとも山鉾渡し度」⁽¹⁹⁾とまで言ったような地域共同体自身の祭祀となっていた。これもまた、この時期の地域社会の動向が、現在の祭祀の直接的な起源となった一例ではないかと思われるのである。

註

- (1) a 普沼晃次郎「滋賀県選択無形民俗資料調査報告 小津神社の祭祀と芸能」(滋賀民俗学会、一九七五年)、b 「近江のケンケト祭り・長刀振り」(二) 民俗文化財地域伝承活動(滋賀県教育委員会、一九八八年)。
- (2) 諏訪氏は、赤野井の有力者で、近世には大庄屋。矢島が踊り番の時、今でも赤野井の諏訪氏に挨拶をしてから出かけるという。
- (3) 「日本荘園データ」1 (国立歴史民俗博物館、一九九五年)「守山市史」上巻(守

- 山市、一九七四年)など。(補注参照)
- (4) 萩原龍夫「中世祭祀組織の研究」(吉川弘文館、一九六二年) 補論第四「典型的な宮座―近江八幡市馬淵の事例―」および第四章一七一―一七三頁。
- (5) 金森町歴史保存研究会「寺内町金森の伝承行事」(金森自治会、一九九〇年)。
- (6) 詳しくは、拙稿「絵図と矢島村の水利」(史料調査報告 矢島共有文書(滋賀県守山市)について)『京都橘女子大学研究紀要』第一六号、一九八九年) 参照。
- (7) 『滋賀県中世城郭分布調査』 田野洲・栗太郡の城(滋賀県教育委員会他、一九八五年)。
- (8) 前掲(7)。
- (9) 拙稿 a「平地城館跡と寺院・村落―近江の事例から―」村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社、一九九〇年。『城と城下―近江戦国誌―』一九九七年、新人物往来社に収録。 b「近江金森一揆の背景」(講座蓮如) 第一巻、平凡社、一九九六年)。また、信長の際に徴収された「元亀の起請文」については、藤田恒春「信長侵攻期近江南郡の村と「元亀の起請文」」(国立歴史民俗博物館研究報告 第七〇集、一九九六年)を参照。
- (10) 前掲拙稿(9)。また、杉江にも、正光寺に明応六年(一四九七) 杉江西道場了善宛の方便法身像があり(内田秀雄・高橋正隆編著『近江守山の仏教遺宝』、一九七八年)、また道場を中心とした集落の姿は十五世紀にさかのぼるとされている(木戸雅寿「考古学からみた中近世集落の発展と都市・町の成立とその問題点」『中世都市研究―都市空間』新人物往来社、一九九四年)。
- (11) 田端泰子「中世後期における領主支配と村落構造」(『日本史研究』第一八七号、一九七八年。『中世村落の構造と領主制』一九八六年、法政大学出版会に収録)。
- (12) 拙稿(9)。
- (13) 佐久間貴士「中世の開発と集落」(『歴史科学』九九・一〇〇合併号、一九八五年)、広瀬和雄「中世村落の形成と展開―畿内を中心とした考古学的研究」(『物質文化』五〇号、一九八八年)、木戸雅寿「水辺の集落の原風景」(渡辺誠編『湖の国の歴史を読む』新人物往来社、一九九二年)など。
- (14) 木戸雅寿・宮下睦夫「横江遺跡発掘調査報告書」Ⅰ(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、一九八六年)、森格也・宮下睦夫「横江遺跡発掘調査報告書」Ⅱ(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、一九九〇年)。
- (15) 守山市教育委員会畑本政美氏の御教示による。
- (16) 木戸前掲(10)。
- (17) 渡辺澄夫「増訂畿内庄園の基礎構造」下巻(吉川弘文館、一九七〇年)。
- (18) 村田修三「惣と土」一揆(『岩波講座日本歴史』中世三、一九七六年)、永原慶二「日本史における地域の自立と連帯―山城国一揆に寄せて」(日本史研究会・歴史学研究会編『山城国一揆―自由と自治を求めて』東京大学出版会、一九八六年)、脇田晴子「山城国一揆と自由通行」(同)。
- (19) 『祇園執行日記』天文二年(一五三三) 六月七日条。村井康彦他『京都の歴史』第三巻近世の胎動(学芸書林、一九七四年) 参照。
- 補註
- 成稿後、「明見庄」を見落としていたことに気付いたので追加したい。範囲は定かでないが、和名抄の「明見郷」との関係も考えられる。しかし、文献に見えるのは十三世紀後半の文永弘安年間までであり、また本文で示したように、この地域では多くの荘園が生成していることから、いずれにしても単一の荘園が祭祀圏の決定的な要因になっているとは考えがたい。
- (国立歴史民俗博物館歴史研究部)
- (一九九七年六月十日受理、二〇〇二年十一月五日審査終了)

The Origin and Function of Regional Festivals: Festival Zones at Ozu Shrine, Moriyama City

KOJIMA Michihiro

This paper examines the historical background to regional festivals, using the festival zones at Ozu Shrine in Moriyama City, Shiga Prefecture as an example. Factors that determine the area comprising any festival zone include manors, water rights, and transportation systems, but careful examination of each of these reveals that none is common to all festival zones. Therefore, when we consider what determines the area for a zone, no single factor was definitive, but rather multiple factors were involved.

Secondly, if we look to who took charge of these festivals, there is no doubt that regional family clans were involved, and in fact in this area, there were organizations that consisted primarily of regional family clans who were active in Ikko-Ikki religious uprisings. However, it is difficult to explain festival zones from the standpoint of alliances of regional family clans.

Meanwhile, if we examine the states of villages at that time, we see that in the fifteenth century, villages were relocating, and new villages that have survived until today were being established through cooperation between regional family clans and organizations of peasants in each villages. It is possible that these organizations of peasants united to solve a variety of regional problems, formed regional communities, and held regional festivals as symbols of these communities. This gives us a key to the direct origins and functions of regional festivals.